

を合漢及び江戸に修め深く之に造詣す明曆以後山鹿業行に江戸に學ぶ數年入室に垂んとて其行罪を獲其の福を得るに及び政春の兵學に於ける其利害を考へ得失を斷ずるに及ぶ

セキヤマ トミ 關山富 法制學者、明治二十年八月三十一日生る幼にして東京に出て日本中學校に學び十年第一高等學校に入り三十三年京都帝國大學法科大學に入

セキヤ リヤウウン 關次凌雲 越後頸城郡國學者、源之助と稱す、寛文時代の人、越後風土考、國道便覽等の著あり

セキヤ サハヘ 瀨川三兵衛 勤王の志士初名は順可、後善和と改め三兵衛と稱す、四歳にして父

セキヤ ヨシオミ 關義臣 司法官、福非藩士山本五郎の二男、開成堂を創立し明治元年大阪府權判事なり

セキヤ シノブシ 石龍子 親相家、逸見氏、名は相葉、字は伯節、松雲と號す、江戸の人、父に居る親相學に通じて法眼に叙せらる文化九年五月廿五日歿す

なく或は山林に坐して道を求め或は松柏に宿りて禪を思ふ世を避け塵を出づるの操ありと雖も國を護し人を利するの行を忘れず而して糧粒得ること稀に飢饉常に切なり伏して願くは本州國分の供を彼所に分給し玉はらんことを然る時は繻衣の徒ららずして修法するを得恩誓すし

セキ リヤウセツ 石良雪 畫家、一に自然畫

セゲウ 施曉 高僧、江州梵釋寺の開祖、晚學内

セツカウ 雪工 畫家、雪舟の門に入りて師の畫風を善くせり

セシケン タイガ 是心軒載賀(是心軒、三世) 松月堂古流生花家、尾藩の士石川茂兵衛の子、茂八

セシンジ ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言行成十五世の孫、參議に任ぜられ正二位に陞る文明十年正月歿す

セツカウ 雪江 畫家、名は安伯、一に蓬軒と號す、雪舟風の畫を能くして法眼に叙せらる(扶桑畫人傳)

セジモ ヨシタタ 瀨下敬忠 國學者、通稱園右衛門、字は子信、鶴東、玉芝、樵路庵、浮瓢子のは

セタ カモノスケ 勢田掃部助 治水家、安貞年中賀茂川洪水にて洛中溺死する者多し時に掃部助勲命を奉じて築法を以て河水を防止す即ち天文永祿の記及

セツカウ 雪江深 高僧、日暮、尾の瑞泉に關し服務留待す筆妙心を再興するに及びて深自ら悅樂に任ずること三年、常住の飯を喫せず筆常に其の知

セシケン ユキスエ 世尊寺行季 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セタ ノリミ 勢多章甫 明法博士、中原氏、世々明法博士大判事たり章房の後裔章武の子、父の業を繼ぎ檢非違使明法博士なる從四位下に叙す維新後皇學所宮内省等に歷任す

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セシケン ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セツカン 雪閑 畫家、奥州岩城の人、畫法を雪村に學べり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セシケン ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セツカン 雪閑 畫家、奥州岩城の人、畫法を雪村に學べり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セシケン ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セツカン 雪閑 畫家、奥州岩城の人、畫法を雪村に學べり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セシケン ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セツカン 雪閑 畫家、奥州岩城の人、畫法を雪村に學べり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セシケン ユキヤス 世尊寺行康 書家、權大納言一條實久の子、世尊寺行康の後を承け諸官を歴て刑部卿兼侍從に至り正二位に進む後天文元年癸酉時に年

セツカン 雪閑 畫家、奥州岩城の人、畫法を雪村に學べり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツカウ 雪江 畫家、雪舟の畫を學びて其風致を得たり遺作に渡唐天神の像あり(皇朝名畫拾葉、扶桑畫人傳)

セツサ-セツシ

(日本河上學燈録)

セツサイ 雪齋 江戸の俳人、氏は大塚、初め根本氏、後重庵と號す。...

セツサン クワクドク 雪山鶴雲 禪僧、一庭に從ひ學び出て常州の長興寺に住す。...

セツシウ 雪舟 畫家、名は等楊、雪舟は其の號。...

井梅泉曰く雪舟は永正三年寂す。元龜三年雪村常陸に流寓す。...

セツシ

梯、岩寒六月留雪、勢似青蓮直過底、名刺雲連清遠古、...

セツシウ 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツシウ 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツシウ 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツシ-セツソ

(日本河上學燈録)

セツシン 雪心 畫家、出山の釋迦を畫きて墨色枯稿、...

セツソウ イウホ 雪窓祐補 禪僧、加州大乗寺の住持、...

セツソウ 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツシウ 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツリ-セツチ

(日本河上學燈録)

セツチウアン ウクワン 雪中庵宇貫(雪中庵十世) 江戸の俳人、...

セツチウアン 雪村 畫僧、名は周繼、如坐と號す。...

セツチ

(日本河上學燈録)

セツチウアン 雪中庵梅年(雪中庵八世) 江戸の俳人、...

セツチウアン 雪中庵梅年(雪中庵八世) 江戸の俳人、...

セツチ

(日本河上學燈録)

セツチウアン ランセツ 雪中庵蘭雪(雪中庵初世) 江戸の俳人、...

セツチウアン 雪中庵梅年(雪中庵八世) 江戸の俳人、...

て土地を開拓することを計画し、銀五島を名にし、其の...

セニヤ 澤内 錢屋善兵衛 狂歌師、日本橋二丁目に住せり...

セノヲ イウザウ 瀬尾雄三 醫家、内科學...

セノヲ カネヤス 瀬尾兼康 平維盛の臣、備中の人...

セニエ 善恵 高僧、靈空と號す、姓は源氏、村上天の後に生る...

セニカ 僂可 畫僧、果雪と號す或は領翁と稱したるが如し...

セニカ 全暇 畫家、赤猫齋と號す、京都の人、

セニエ―センカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

て來り終夜劇敵す成氏醉て臥す兼康、成氏を刺て之を殺...

セノヲ ヨウセツサイ 瀬尾用拙齋 平安の儒者、名は維賢...

セノヲ リウサイ 妹尾柳齋 古銭家、大阪の人、泉譜及び世寶錄を著す...

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

セニカ

より後毎夕蟬丸の庵側に行き観ひ聽くこと三年、然るに...

センアン イチリン 全卷一蘭 禪僧、阿州桂谷寺の住僧...

センイウ 善育 高僧、字は大林、相模の人、幼より出塵し...

センイウ テイエン 禪僧、加州の人、妻を捨てて禪學を講ず別傳の道ありと聞き注意...

センエ 詮慈 高僧、姓は源氏、近江の人、幼にして出家し...

センカ

センカ

センカ

センカ

センカ

センカ

センカ

センカーセンキ

保十九年五月十二日... (池坊系譜)

センカク 暹覺 高僧、俗姓壬生氏、豊後の人、...

センカク 仙覺 歌人、其の姓系郡里を詳らかに...

センカン 禪鑑 弘長元年英祖の時何處よりか...

センカン 千吟 貞婦、茶人千宗易の女、名は阿...

センキ 善識 高僧、俗姓懸河内綿織郡の人、...

センキ

旨を得又海を渡りて唐土に入り...

センキ 禪喜 高僧、姓は藤原氏、平安の人、...

センキウ セキシツ 善致石室 禪僧、筑前...

センギン 千吟 貞婦、茶人千宗易の女、名は阿...

センギン 蝶吟 俳人、伊賀藤原氏の老臣藤原...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センキセンク

北村季吟に學ぶ、芭蕉の名家なり

センキセンク 善均 禪僧、山城國臨川寺の僧なり...

センキウサイ ハルヨシ 千金齋春芳 狂歌師、...

センゲ 善教 禪僧、加州の人、年十三にして...

センクワウ ドンフ 全快鈍夫 禪僧、鎌原...

センケ タカズミ 千家尊澄 國學者、尊孫...

センクワク 仙鶴 俳人、江戸の人、姓は堀内...

センクワク 仙鶴堂 戲作者、鶴屋喜右衛門...

センクワク 仙果亭嘉栗 戲作者、浪華の人、姓は三井氏、...

センクワク 仙果亭嘉栗 戲作者、浪華の人、姓は三井氏、...

センクワン 千観 高僧、姓は橘氏、父母初め子...

センクワン 千観 高僧、姓は橘氏、父母初め子...

センクワン 禪觀 大和東大寺の律僧、長樂...

センクワン 仙華門院 伊勢齋宮、姓は...

センケイ 善桂 高僧、字は香林、法を青山悟公...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センケイ 善慶 南部の大佛師、法橋に叙す初め...

センク

センク

センク

一四〇五

センケ タカヒコ 千家尊孫

雲國造尊之嫡男、天保三年出雲大社御代...

センケ タカムネ 千家孝宗

千家氏の祖、父孝時三子あり長を清孝と云ふ...

センケ トシノブ 千家俊信

雲國造俊勝の二男、一家を分立し千家古主と稱す...

センケン 仙原

を知らず一國師に依て高職に歴任す後鎌倉に往て無學...

センケン 善元

學べり而して實は周文の風格より出て善く活動の態を...

センゴク サキヤウ

馬出石の領主仙石美濃守政美の臣にして父を某と云ふ...

センゴク ヒサカタ

年夏秀吉四國を征伐す先驅し扇島を攻て之を拔く八...

内蔵介と稱す、但馬出石後仙石氏の一族、人となり温厚...

センゴク ヒサカタ

兵を併せて千餘與に交戦し敵を追ひて何に至る存保護實...

センゴク ヒサカタ

石藩主、明治維新後大學少監となり少議官侍從等に歴任...

センゴク ヒサカタ

仙石政隆 仙石政隆 仙石政隆...

仙石政隆 仙石政隆 仙石政隆...

センニヨ 宣如

宣如 貞宗の曾、本願寺第十三代名は光從、愚溪と號す光壽上人の第二子なり慶長九年二月二十日生る童名を長慶と云ひ九條關白兼孝の猶子なり...

センニヨ 善如

善如 貞宗の曾、山城本願寺第四代名は俊玄、第三子宗昭上人の孫にして從譽法師の子なり...

センバイ シヤウアン

千泉性俊 貞宗の曾、山城本願寺第十二代名は光從、愚溪と號す光壽上人の第二子なり...

センバハ リハウ

千羽理芳 挿花家、舊大進寺藩公用途、加賀金澤の人、その曾祖父松泉斎東庵が...

セン ヒツトウ

泉必東 兼家、(一)に錢必東に作る名は貞字は恒福必東其の號、浪華の人、幼より...

センヒメ

千姫 徳川家康の孫、秀忠の長女、慶長十二年十一月一歳にして豊臣秀頼に嫁す元和元年大坂...

郎左衛門吉田邸に臨む而して經已に自盡す是に於て刑を免れ...

センホク テンシツ

禪陸天室 禪僧、上總の人、州の三途堂に依り剃髮す武州龍泉寺の節庵禪師...

センホフ 善法

平文師、(一)に禪法に作る、花開天皇の時人、正和四年四月朝命を奉じて近江國日吉...

センミヤウ 仙命

丹州の人、幼にして台山の無動寺に上り止觀を學ぶ兼ねて淨業を修す嘗て聖...

センムキ 善無畏

高僧、天竺甘密王の婿唐の開元四年長安に至る玄宗預め眞儀を夢入りて對するに...

センヤウモンキ

宣陽門院 後白河天皇の第六皇女、御母は從二位高階榮子(丹後局)相模守平業...

センヨ

院號宣下、三月後白河法皇崩御前に六條長講堂に長講堂を讓與せられたり後丹後局、後白河法皇の寵ありし...

センリ

泉里 浮世繪師、江戸の人、美泉の門に師事す...

センリ

川柳(初世) 俳人、前向附の點者、川柳の始祖、柄井氏八右衛門と稱す、曾祖將寛寛政十年輪...

センリ

川柳(四世) 川柳家、人見氏周助と稱し風庵と號す、元來川柳の句は前向附と呼び下の句を...

センリ

川柳(六世) 川柳家、五世の長男、金次郎と稱し後金藏と號す、名は蘆、和風亭と號す、明治...

セリウ

任風舎と號す、明治廿四年十月一日歿す年七十三

セリウウチイ カラマル 千柳亭唐丸 狂歌師、奥州仙臺侯の醫官にして名は弘景、字は子徳、通稱を即休といふ、其先は清和天皇の裔孫近江國の住人

セヤタラヒメ 勢夜多良姫 三島藩横耳の女、攝津國島下郡三島に漢社あり之に祀る一の名は勢夜陀多良比賣又の名は玉櫛姫又の名は漢姫と云ふ大物

セヤマ カネ 世家真かね 舞踊(師匠)植木店十郎の門人にして歿後世家真かねの絶えたるを起す其の實姉藤間よしと號す植木店藤間の家系たるを及ぶ其の家系を預り藤間かれと號す明治廿五年八月廿七日歿す年六十一

ソ之部

ソアン レウダウ 素安了堂 禪僧、筑前博多人、年十三同原本公を州の保寧寺に證して削髮受戒す從學久しうして忽ち悟る處あり去て相模の圓覺寺の西

ソウエン エンケイ 祖雄遠溪 禪僧、丹波氷上郡佐治の莊藤原光基の子、幼名了時より謙量に號し年長じて既に遷世の意あり宅前に古松の盤屈して蒲輪の如きものあり唯常に其上に跣脚す父其盤屈にして

ソウアン センシツ 宗安禪室 禪僧、但州の人、壯歳にして澹州妙應寺に出家大徹令公を禮して師となす執持すこと十五歳機語相契大徹岐山に傳はる衣を以て宗に付す初め能州總持寺に出世しち立川寺に還る晩に山を播州に開て之に居す眞光寺と曰ふ(日本洞上禪燈錄)

ソウイウ 總融 高僧、字は通融また雪心の號あり久しく靈波に侍して律範を習研す學は諸教に渉る最

セラシ

良修藏なり道を別て會津を征す修藏警城福島に次す已に侯亦爲に數願書を呈して其の寛典を請ふ總督之を許さん

セラシウウチイ 世良親王 後醍醐帝の第二子、母は藤原氏、幼にして聰敏才器人にして過和歌を善くし音律を曉る時人心を降す帝甚だ之を愛す昭慶門院養ひて子とす親王となり上野太守太宰帥に拜せらる河端宮と稱す

セラタ リヤウ 世良田亮 軍人、舊信州上田藩士にして安政三年十月三日を以て生る明治五年九月海軍兵隊に入り八年六月米國留學を命ぜられて渡米し十年九月米國兵學校に入學し十四年七月卒業して歸朝す直ちに海軍中尉に任じ東海鎮守府在勤を命ぜらる十五年九月大尉に進み十九年三月參謀本部海軍部第六課長心得を命ぜられ居ること一年餘にして翌年五月清國公使館附に轉じ同年十月少佐に昇任す二十三年八月海軍參謀部出仕となり翌年六月葛城艦長に補し更に滿洲艦長に轉じて二十六年十二月大佐に任じ天龍艦長に補し二十七年二月

セラタ セウキ ヒサト 瀨脇壽人 蘭英學者、初めの名は手塚律藏、周防熊毛郡に生る萩藩某の次男、長崎に遊び高島秋帆塾に蘭書を學ぶ後江戸に出て幕府の時計御用達上野後之丞の家に入り村田敬齊、緒方綱壽等と共に理化學を學ぶ、米使べり来るの時幕府に召されて外國語となり審判所に出仕す本郷元町に蘭學塾を開き子弟を教授す神田孝平、津田仙等其の高弟たり後英書を自修しまた廣く志士と交る蘭譯を守るの徒蘭英學者を惜み難に遣ふ者あり律藏亦た屢々追善に遣ふ蘭譯を以て名を瀨脇壽人と改め暫く佐倉に隱る同藩士の高島藩士を以て蘭英文典を著す終に佐倉藩士となる維新の後蘭成所設官となり外務省七等出仕に補す瀨脇壽人に領事館を設置せんとことを建議すまた瀨脇壽人占領を建議す明治八年始めて浦羅に貿易事務官を置かれ之に任ぜらる任地に復すこと數回、同十一年各越年の豫定を以て赴任す十一月病を以て歸朝す浦羅に還るの際廿九日遽かに卒す年五十七子春雄と爲る

セリタ

正六位勳六等に叙せらる此年日清事を構ふるや七月佐世保を發し二十五日豊島海戰に參與し爾來陸軍の護送山東角及び東高角附近の偵察花園口及び榮城嘴の揚陸援助

セリタ セウキ ヒサト 瀨脇壽人 蘭英學者、初めの名は手塚律藏、周防熊毛郡に生る萩藩某の次男、長崎に遊び高島秋帆塾に蘭書を學ぶ後江戸に出て幕府の時計御用達上野後之丞の家に入り村田敬齊、緒方綱壽等と共に理化學を學ぶ、米使べり来るの時幕府に召されて外國語となり審判所に出仕す本郷元町に蘭學塾を開き子弟を教授す神田孝平、津田仙等其の高弟たり後英書を自修しまた廣く志士と交る蘭譯を守るの徒蘭英學者を惜み難に遣ふ者あり律藏亦た屢々追善に遣ふ蘭譯を以て名を瀨脇壽人と改め暫く佐倉に隱る同藩士の高島藩士を以て蘭英文典を著す終に佐倉藩士となる維新の後蘭成所設官となり外務省七等出仕に補す瀨脇壽人に領事館を設置せんとことを建議すまた瀨脇壽人占領を建議す明治八年始めて浦羅に貿易事務官を置かれ之に任ぜらる任地に復すこと數回、同十一年各越年の豫定を以て赴任す十一月病を以て歸朝す浦羅に還るの際廿九日遽かに卒す年五十七子春雄と爲る

ソウイウ

も華嚴に通ず當時の學者貴て先徳と稱す大和の龍華院に住し戒壇院に移る三學均等にして衆會悅可至徳三年四月二十一日卒す(本朝高僧傳)

ソウイウ 増祐 高僧、播州真古郡の人、如意寺に住して證道慈なる天延四年正月晦日諸弟子に告げて曰く我が行期已に至り宜しく減す一穴を穿つべしと諸弟子其の中に入り佛を誦して滅す時衆人の念佛を唱ふる聲あり然れども其の形を見る能はずと云ふ(東國高僧傳)

ソウイウ ギイチュウ 宗宥任仲 禪僧、奉屋師の室中稱して上首となす能州總持寺に出世し永深最乘の諸刹に移る江州の太守源氏頼隆州關ヶ原に於て天徳寺を創め宥を請ひて始祖とす(日本洞上禪燈錄)

ソウイウ フクアン 宗已復庵 禪僧、弘安三年當陸の宮家氏に生る幼にして出家し學を修む東關を遍歴して參叩殆んど盡く延慶三年無障庵等の同參と海に泛で元に入り直ちに天目山に上り中峯和尚に従ふ、時

ソアン

ソアン ソウイウ 祖一峯翁 禪僧、家居して書を讀み學内外に渉る年廿四にして教外の宗を慕ひ

ソウア

ソウア ソウイウ 總融 高僧、字は通融また雪心の號あり久しく靈波に侍して律範を習研す學は諸教に渉る最

ソウイ

ソウイ 宗已復庵 禪僧、弘安三年當陸の宮家氏に生る幼にして出家し學を修む東關を遍歴して參叩殆んど盡く延慶三年無障庵等の同參と海に泛で元に入り直ちに天目山に上り中峯和尚に従ふ、時

し之に書籍を授け朝に受け夕に還す朝々誦讀す幾はくならずして學問に涉り精しく三歳に通ず忽ち三十歳にして曰く世尊道成し孔子而立す我今不成不立正には有氣の死人なり是に於て改改座究すること数年遂に廓然證入するあり...

ソウ サタクニ 宗貞國 對馬守護、彦七の津と定む安元元年八月弟盛國盛世等筑前國高嶺の舊地を復せんと欲し大内氏の兵と肥前國春日山に戦ふ克すし...

ソウザン シホウ 宋山士峰 禪僧、姓は石橋氏、世々勢州藤崎に居る幼にして妙見寺の等閑禪師に依りて剃髮し十八にして具戒を受く...

巖寺に參り遊遊して元に入り瀛く朝制を歴訪す秀華論に工なり元の子詔して浪りに書するなからしむ歸朝するに及び關西に遊び吉備の中山に到り詩を作りて風光を賞し且つ素懷を述ぶ出でて相模の淨智及び建長寺に住す...

ソウ シゲモト 宗成職 對馬守護、刑部少輔と稱す享徳元年封を襲ぐ閏七月朝鮮國より船二艘を送り一は貞盛が喪を弔ひ一は成職が封を賀す是朝鮮と吉備國との始なり...

ソウ シン タイゲン 宗真大源 禪僧、加州の人、幼より逸辭にして世俗を脱せんとす初め某寺に入り後峨山に龍州總持に參して長壽觀音之を久うす敬信するに及びて山法衣を以て之に付す時貞和五年なり...

ソウテ

す法化盛なり朝廷特に徳輝普燈師の號を賜ふ慶長十... 九年七月八日病篤く病を説て曰く、説其頓夢、論其熱...

ソウテ

南朝の忠臣菊池武光のために安永八年巨費を投じて限... 城の西南隅に存する其の墳上に菊池正親公神道碑...

ソウテ

芝田の子、世々武を業とす年弱冠して遊世相を厭ひ... 従て被削し其武を慕くち参方して遊翁に乾坤に依る...

ソウテ

州の人、同州佛陀寺大容禪師に投じて旨を源門に得佛... 州の人、同州佛陀寺大容禪師に投じて旨を源門に得佛...

ソウテ

に出せし再び能州總持寺に主る(日本洞上聯燈錄)... 州の人、博學にして文章を善くす出家の後諸老に偏參し...

ソウテ

ソウトウ 曹洞 曹家、能く筆翰の人物を畫け... 里筆法眞相より出づ(本朝畫史)

ソウテ

ソウトク 宗得 曹家、狩野元信に學びて畫を... 能くせり(扶桑畫人傳)

ソウテ

ソウバイ テイアン 宗梅鼎庵 禪僧、隅... 州の人、久しく覺悟和尙に關繫し依り竟に深旨に契ふ...

ソウハ

州の人、久しく覺悟和尙に關繫し依り竟に深旨に契ふ... 去て備後奴可の山中に退き徳雲寺を營む納子縁に數輩未...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウハ

覺めて灼然たり即ち名を宗分と改め然る後林下に迹を暗... ますこと七年法を台殿和尙に隔き自ら謂ふ道を弘め人を...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウハ

山に入るや持持隨員として一行を歓迎し後大倉喜八郎と... 相識り共に計りて商館を釜山に新設したが暴徒の爲めに...

ソウハ

ソウハク 宗白 曹家、雜畫を善くし最も小鳥... 唐に就し舒明天皇の四年八月唐の靈雲と共に歸朝す九年...

ソウホ

ソウホウ タイジユ 宗彭大壽 禪僧、隅... 州の人、宗匠に歷參して未だ契はず後に天巖に依る天巖...

ソウホ

ソウホウ タイジユ 宗彭大壽 禪僧、隅... 州の人、宗匠に歷參して未だ契はず後に天巖に依る天巖...

七歳の時刀を磨く人を見て問うて曰く快利ならざる所
に却て快利なるあり子これを知るか其の人知ることな
信律師に付す未だ幾ばくならずして台宗の奥秘悉く心府
に納む達磨の禪を慕うて願求する心切なり高峯禪師に萬
丈の語を讀むを聞き靈光洞燭遊歴三根靈體眞常不凋
文字といふに至つて豁然として省るこゝあり高峯乃ち
これを肯可す嘉元己の秋大應園師を奉じて其業より
來り洛の報光庵に僧す宗峰徑に至て諸問す大應萬壽の請
を受け宗峰隨て参仕す大應雲門の關の字を看せしむ宗峰
別て須らく生涯あるべし宗峰憤悶精究善德治下未の年大
應相模の建長寺に住す宗峰また隨ひ侍す未だ旬日を經さ
るに案上に鑰鎖を放任するに當て忽然大悟し滿背汗流る
急に方丈に趨き聲を抗て曰く即今和尚と趣きを同うせり
と大應忻然として曰く嗜者夜夢も雲門大師光貫を垂る
と豈偶然ならんや宗峰耳を掩つて出づ翌日二僧を呈す大
應便ち其の後に書して曰く爾既に明投暗合す吾宗備に到
て大に世に與らんこれ二十年長養して然る後に人をして
吾證明あることを知らしめよ宗峰時に年二十六、延慶戊
申の年大應寂すそれより都に同り洛東の雲居寺に遷居す
納侶數輩枯淡自ら強むる二十年に垂んとす嘉祥丙寅の
年城北紫野に抵て小院を構て居る壁下の繡白參問する
の多し法印玄慧といふものあり博く内外の編白參問する
の後宗峰に歸來りて參禪し粗く造詣あり因て私
宅を捨てて爲めに方丈を建てまた都人宗印といふ者あり
素と富家なり自ら化主となり諸の堂宇を營み藝として
禪利と成る歸して龍寶山大徳寺といふ貴紳高官衣を擯げ
香を捧て會に歸して龍寶山上皇宗峰の遺法を開き詔
して宮に入る上皇僧伽藍を著けて對坐し法談時を以て
感歎ならん時に興禪大燈師の號を賜ふ後醍醐帝恩益
益深し宗峰因りて法語一書を遺ひ上もまた偶を賜て曰
く二十年來辛苦人、迎々奮不疲奮風烟、著衣喫飯愆度
去大地那曾有一塵、また高照正燈燭師と加稱し并に兼
帛を賣ふ重れて救して大徳寺を奉じて南禪上刹に相並て
觀聖の遺場となす仍て莊田若干畝を給して以て香積に充
つ建武四年冬疾を得臘月廿一日の夜諸弟子に遺誡して曰

く我滅後火化して骨石を丈室に置き別に塔を造ること勿
れと翌日午時遺骨を遺して而して逝く年五十六、法臘三
十四、嗣法の者十五人語録若干巻夜話記一卷あり世に行
はる眞享三年聖旨を以て大慈雲匡眞國師と加誥す(本朝
高僧傳)
ソウミヤウ 増命 天台山の座主、平安の人、朝
散大夫桑原安峯の子、台山の延敷に師事し講席に臨む毎
に文詞煥發年十六にして大成を受く客來れば少長となく
皆之に接するに禮を以てす疾む者あれば鉢飯を與ふ圓珍
座主に従つて三部の灌頂を得偶々西塔の釋迦院に坐夏す
院の南に大巖あり形如の如し居るもの多く天宮す坐巖前
に呪すること七日、忽ち白晝に雷起りて巖即ち崩潰す右
大臣源光自ら生壽五十九に終らんを知り年を延ばさんと
欲す因つて命に請ひて佛事を脩せしむ此の如くすること
二次皆な證驗あり延長元年菅相承の神靈奮激して皇城を
震動す太子之に死す上代に恐れ命に詔して宮に入らしむ
凡そ百餘日待臣多く神兵官闈に列するも夢む延喜五年寛
平上皇台山に幸きし命に從て密灌を受け阿闍梨の位を授
け手から袈裟、香爐、御衣等を賜ふ後また座主僧正に造
む延長五年寂す年八十五、諡して靜觀と曰ふ(元亨釋書、
東國高僧傳)
ソウメイモンケン 崇明門院 後醍醐天皇
の皇太子邦良親王の妃、祺す内親王と云ふ後宇多天皇の
第二皇女に生る御母は拾子女王元應元年十月内親王
宣下、皇太子邦良親王の妃となり給ひしが正中三年皇太
子亮去後尼となる元弘元年十月三宮に准じ奉りて院號宣
下、三年一度門院號を止められしが延元三年四月復せら
る(女院小傳、皇皇親錄)
ソウモリアキラ 宗盛明 對馬守護、助
の子、右馬太郎と稱し文永十一年遺領を繼ぎ蒙古の將所
都、洪茶正及び高麗の將金方慶等兵を率ゐて對馬國を侵
す國兵之に對し退く弘安四年五月又元文虎等兵十餘萬を
率ゐて對馬國に及ぶ筑前を侵す感討つて功あり(寛政
重修諸家譜)
ソウモリカズ 宗盛貞 醫家、寛喜中右衛
門の醫師となる同族宗繼、左兵衛の醫師となる(皇國名
醫傳)

右馬太郎、右馬頭盛國の庶長子にして筑前宗像城に生る
母は別室方氏の出、茂近、新六皆庶子なり、經茂、頼
次は正室武藏氏の出にして嫡子なり故を以て經茂、頼次、
盛直、茂近、新六の輩とされり正平元年二月盛直對馬の
佐賀村に在り是より先き盛直世子經茂と立たんことを争
ひ再戦して敗る經茂と其の志を異にして南朝に投じ子盛
義を拉して肥前に奔り菊池肥後守武光に仕ふ後北朝諸將
と筑前味坂に戦ひて死す時に年七十一、其の子孫四代悉
く南朝の爲めに忠烈なる戦死を遂ぐ(對馬人物志)
ソウモリヒロ 宗盛弘 對馬豊崎の郡主、
永正七年四月藩主宗義盛の命を受け兵三百を率ゐて朝鮮
を伐つ盛弘兵船を率浦より發す是より先き大内氏の使船
朝鮮に到り國王殿使と稱す朝鮮歸するに對馬の引なきを
以てす使者者大内氏は備前守對馬に其の引なきを
何ぞ彼が文引を取らん朝鮮其の使を納る義盛の使者至る
に及んで朝鮮受けず義盛大に怒り乃ち盛弘をして之を伐
たしむ盛弘、島人の三浦に在る者と攻めて津浦の熊川城
を抜き食使李友言を斬り進んで防禦使梅村、黃壽等と
戦ひ兵皆之れに死す鮮人の死者萬を以て數ふ六月盛弘
を高崎に祀り高崎大明神と號す是れより朝鮮の通交絶ゆ
(對馬人物志)
ソウヨ 増雲 近江延曆寺(天台宗)の座主、權大
納言藤原原輔の子、幼にして佛に歸し園城寺行觀僧正に
師事して得度す普く聖跡を巡り呪禁修行して神慮あり三
井の千光院及び洛東の聖慶院を建て熊野神宮を勧請す應
元年秋中宮賢子崩す白河帝、増雲を召して法華實相の深
旨を開き教して法印に任す寛治三年三井の聖園の譲り受
けて法務となる五月勅を受けて神皇正統記に孔雀經法を修
して兩を繕る、八年秋東遷して天王寺の主、權僧正、廣
隆寺の司、園城寺の長吏となり康和三年奉白河上皇、鳥
羽院に論議を開き僧に命じて證議者たらしむ翌年僧正正
に轉じ三山の檢校を主とる、此職増雲より始まるなり
大僧正に任じ證議、梵釋、崇福等十三寺を兼領す嘉永二
年最勝會の證議者となる永久四年二月十九日寂す壽八十
五(本朝高僧傳)
ソウヨウ 宗用 畫家、眞相の筆意に法りて能

く瀛人を畫くまた山水あり(樂定便覽、扶桑畫人傳本朝
畫史)
ソウヨウ 僧銘 眞宗の僧、字は子練、空華庵
と號し江村の民家に生る十一歳の頃洛陽に水懸して在り
しを靈潭禪師通して見る處ありけるにや強いて與中
に入れて歸る父母周章して之を尋ね往きしにや祝髮せり
其れより専ら僧風を慕ひ偶々家に歸るも宿僧せず唯眞
に取り十四歳にして上京せしに日没後三年に成りしに
生涯の遺徳なりと云はれたり昨夢師に隨ひ眞宗の遺訓を
傳ふ禪師に年七八歳許ありしが禪師、其の像器を愛し
て生涯弟子の列に入れざりしが禪師、慧雲等何れも
同門なり然れ共世舉て陳善門下の顔回とぞ沙汰しける
十一歳にして剃髪し二十二歳にして浦山善巧寺の嗣法と
なり三十一歳にて初めて講道し四十一歳にて侍講の命を
蒙り五十一歳にて拜官し六十一歳にて寂す僧銘後には眞
慈あり越中に轉空といふ人英邁の器なり僧銘後には眞
宗になりて初めより騰十年を許されける老後後歸宗せら
れしが天下の老僧尊稱せざるなし皆曰く咸仁兼れ持する
と僧銘の如きはなし(清流紀談)
ソウヨシカタ 宗義方 對馬府中藩主、義
眞の四男、眞享元年府中に生る、元祿七年六月兄義倫が
請ふ旨あるにより十一月その遺領を繼ぎ義方幼少なるに
より義眞已に致仕すと雖も朝鮮のことは義眞之を勤む可
きを命ぜらる時に十一歳、二十八日始めて將軍綱吉に謁
す此日義倫が遺物米圖の刀渡瀧の茶壺を獻じ御台前に
飛鳥井親筆の古今集をまいらす九年十二月從四位下侍
從に叙任し對馬守を兼ね十四年九月義方已に成長するに
より朝鮮のことを沙汰す可しされと義眞も之を助く可し
との命を蒙る十五年三月始めて入國の暇を賜ひ八月奉書
を以て義眞が喪を尋ねらる寶永三年十二月先に徳川家宣
發君の命を賀さんと爲め朝鮮の譯官使對馬國に至る後
慶賀ある毎にこれを例とす六年六月家宣御代始に入國の
暇賜はり青江の刀を拜領す正徳元年四月家老の輩朝鮮人
と應接し或は信使來聘の時假に六位の裝束を著すること
を許さる七月義成が時より長刀を持たしむること中絶せ

しを朝鮮のことを勤むるにより以來在府の時も先例の如
くたる可き旨恩許を被る十月朝鮮の信使を伴ひ參るに
り五百百枚を賜はる二十七日義方信使を伴ひて登營す正
使通政大夫趙泰伯、副使通政大夫任守幹、從事通政大夫
李邦彦、圖書方官を伴ひて御代替を賈す時に義方信使を
登營すの日のみ職に乘ることを許さるその後三使を率ゐて
し義方其事を預り議す十一月信使を賜ふ十三日義方
に來國後の刀を賜はり朝鮮の例に改めらるる際心書を
して務めしことを賞せらる義方近年表討乏しきを聞召し
柳川豊前調製が舊肥前國基津郡の内にて千五百六十
石餘の地を加へ家五人に時服白銀千代米年宰する
により奉書の御味を蒙る四年正月箕輪の別荘より出火せ
しにより出仕を止められ十四日許さる十五日將軍家繼よ
り光忠の刀を享保二年七月將軍吉宗より越州國行の刀を
拜領す(中略)是より先朝鮮國に産する人參、鹿、馬、虎
皮、新渡の陶器並に東醫寶鑑一部を獻す又彼國より漂流
せしものを送り來る事凡そ六度我國より漂流のものを送
り遣すこと凡百十三度或は唐船の對馬國に漂着せしもの
を沙汰す三年九月五日府中に卒す年三十五、眞乘寶輪大行
院と號す十月奏者番松平備前守正久をして贈銀二百枚を
賜ふ(寛政重修諸家譜)
ソウヨシサネ 宗義眞 對馬府中藩主、義
成の子、寛永十六年生る、二十年八月將軍家光及び家綱
に謁し武器及び菓子等を賜はる時に五歳、正保三年五月改
めて拜領の禮を行ふ明暦元年六月從四位播磨守に叙任し
三年十二月遺領を繼ぐ此の日侍從に進み對馬守に改む二
十八日父が遺物光忠の刀及び徵宗帝自畫福祿壽掛軸を
獻す萬治元年六月始めて入國の暇を賜ふ二年五月朝鮮國
より破黄を乞ふにより聽許を経て之を送る三年正月去冬
府中火災に罹るにより慶米一萬石を賜ふ將軍家綱寛文八
年先に阿闍梨人朝鮮に漂着し今に彼の地にありて十四年
を經るを聞き義眞に命じ之を請ふて長時に送らしむ是年
先に九州のもの尙に朝鮮に渡航し制禁を犯して武器等を
交易せしにより罪科に處せらる之によりて朝鮮國に於て
も其の黨類を絶し重れて斯の如きことなき旨を告ぐ延寶

元年朝鮮國にある釜山の屋敷位置宜敷からざるを以て幕
府に請ひ朝鮮と商議して草壁に移す天和元年五月將軍綱
吉御代始入國の暇を賜ふにより備前吉房の刀を賜ふ二年
朝鮮の正使通政大夫尹世完、副使通政大夫李彦卿、從事
通政大夫朴慶來等八月義眞三使を伴ひて登營す其例
前の如し九月義眞を召され、此度朝鮮信使の接待心を盡
して勤めしこと悦び恩召す處なり元來諸國通信の可し
とを命を蒙る六月信使を賜ひ共に諸事を圖る可し
との命を蒙る是年家宣をして信使を朝鮮に遣らしむ元祿五年六
月致仕し七月得物左定吉の刀及び袖袂の茶壺を獻じ御台
府中に爲忠筆の古今集を參らす十九日刑部大輔に改む十月
所に行くの暇を賜ふ義眞病者たるより遠路の往來を
慮り恩召し兩三年封内に休息し奉府の時より之を何ふ可き
命を蒙る七年十一月遺領を義倫が弟義方に賜ふと雖も未
だ幼穉なるを以て朝鮮通信のことは義眞を勤む可き旨仰
を被る九年正月府中に行くの暇を賜ふ此時我國と朝鮮と
の間に在る處の竹島に往年より兩國の人雜居すと雖も此
後我國人の彼島に渡ること禁ぜらる十月朝鮮の譯官
使府中に來るにより其旨に達す十四年九月義方已に成長
に及ぶにより朝鮮通信の事を務む可き旨御前より然れど
も義眞猶ほ後見たる可き旨の仰を被るより先き仰によ
り朝鮮の人參、鹿、馬、虎、貂の皮、新渡の陶器等を奉
ること屢々なり又我國人彼地に漂着せしものを送り來る
こと六度彼國より漂流せしものを送り遣すこと凡そ四十
四度或は唐船の對馬國に著岸せしを長時に送ること五度
義眞皆之を沙汰す十五年八月七日府中に於て卒す年六十
四、高麗宗屋天監院と號す二十三日奏者番松平多正少弼
忠晴をして贈銀二百枚を賜ふ(寛政重修諸家譜)
ソウヨシシゲ 宗義調 對馬國主、晴康の
子、初め義親と稱す、天文十一年十一月足利義晴より諱
宗を與へられて義親と稱す二十二年正月對馬を襲き弘治元
年海賊對馬國を經て朝鮮に寇す佐賀に於て賊船一隻を討
取る永祿二年家臣山本右馬長範、頼奈彌八郎調親反し賊
船を率ゐて船越浦を侵す義調二位豐前盛家をしてこれを
討破り長範、調親を彦根國勝浦に誅せしむ六年足利義晴
遺正を使として來らしめ義調を讃岐守に任すこれより先
朝鮮足利家の請により年毎に遣す處の船五隻を加ふ九年

ソウレーソウエイ

きて學侶を引接するを聞き千里を遠とせず往てその室に... 宗義直翁 禪僧、遠江の人、禪教俱に通じて文藻あり...

ソウレン チョクテウ

天先和尚に學ぶ初め能州總持寺に出世す應永辛卯の年天... 宗義直翁 禪僧、遠江の人、禪教俱に通じて文藻あり...

ソウエイ 祖榮

及び水邊の畫に巧なり(扶桑畫人傳) 畫家、雪村に學びて設色の花鳥... 祖榮、雪村に學びて設色の花鳥...

ソウエイ チクハウ

の人、禪教俱に通じて文藻あり 禪僧、遠江の人、禪教俱に通じて文藻あり...

ソウエイ テツガン

の人、姓佐伯氏、母紀氏奇夢を感じて振占者に問ふ... 禪僧、遠江の人、姓佐伯氏、母紀氏奇夢を感じて振占者に問ふ...

ソウエイ ツキガク

年應永十二年八月十七日化す年八十二(本朝高僧傳) 清苦遊歴を志す風貌を見るに及びて一語の下に脱落す...

ソウエン キアン

人、幼にして相の淨妙寺に投じ出家して佛光に瑞鹿等に... 禪僧、信州の人、幼にして相の淨妙寺に投じ出家して佛光に瑞鹿等に...

ソウウ ムガク

人、幼より英敏に桑門を慕ふ東福寺の清深禪師を禮し... 禪僧、出雲の人、幼より英敏に桑門を慕ふ東福寺の清深禪師を禮し...

ソウウ シンサイ

は定保、晉書に世宗政十二年若代國二本松に生る父は... 漢學者、名は定保、晉書に世宗政十二年若代國二本松に生る父は...

ソウウ チカミツ

め菜三郎、後關次と稱す、省名と號せり、伊豫松山の藩... 馬術家、初め菜三郎、後關次と稱す、省名と號せり、伊豫松山の藩...

ソウウ ウマコ

武略に習れて且つ才辨あり深く佛法を敬す敏達帝元年大... 大臣稻目の子、性武略に習れて且つ才辨あり深く佛法を敬す敏達帝元年大...

ソカアソガイ

麻呂の子、齊明帝幸東の温泉に幸す赤見留守たり會々有... 大臣馬子の孫、倉麻呂の子、齊明帝幸東の温泉に幸す赤見留守たり會々有...

ソカイ 素海

祖は韓子、父は高麗、稻目宜化帝の元年に大臣となる欽... 石川稻目の玄孫、祖は韓子、父は高麗、稻目宜化帝の元年に大臣となる欽...

ソカイ イナメ

日く聖王は謙、天地に達し、名、四表に溢る一旦顧に福... 蘇我稲目、日く聖王は謙、天地に達し、名、四表に溢る一旦顧に福...

ソカイルカ

蘇我入鹿 蝦夷の子、一には... 蘇我入鹿、蘇我稲目、蘇我入鹿、蘇我稲目、蘇我入鹿、蘇我稲目...

ソカウ

は舒明帝の子にして其の母は馬子の女なり、二年小徳巨... 十河一存、讚岐十河城に住し、左衛門督と稱す、また民部大輔讚岐守と云ふ人となり...

ソカウ

細川晴元人を遣して一存、元政をして和を講じ兵を止め... 十河親盈、馬術家、初め菜三郎、後關次と稱す、省名と號せり、伊豫松山の藩...

ソカウ

臣となる十三年鹿深臣佐伯連百濟に往きて彌勒の石像... 蘇我入鹿、蘇我稲目、蘇我入鹿、蘇我稲目、蘇我入鹿、蘇我稲目...

ソカウーソカエ

成る致して子善徳を以て帝司となす崇神即位す大匠... 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガウ マサヤス 十河存安

彼の人、字は不言、別號は臥翁、五郎と稱す、人となり... 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガウ ロクイウ 十河六有

大年、字は永澄、京都の人、夙に福壽敬重に從ひ謙裕の... 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガウ エミシ 蘇我蝦夷

蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソカキ

皇子山背大兄王各々遺詔を受け非ざるに及んで皇嗣未だ定... 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ キョクテウ 曾我玉翁

蘇我玉翁 蘇我蝦夷の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウシヤウ 曾我紹祥

蘇我紹祥 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウシユク 曾我紹叔

蘇我紹叔 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソカクーソカケ

勢直庵に秀らすと云ふ(扶桑集人傳) 山田石川麻呂 我國最初の左大臣、大臣馬子の孫... 蘇我蝦夷 馬子の子、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ ケイイウ 曾我慶祐

曾我慶祐 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ ケイイウ 曾我慶祐

曾我慶祐 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ ケイイウ 曾我慶祐

曾我慶祐 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

(皇國名醫傳)

ソガ ケンセン 曾我玄仙

曾我玄仙 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ ユセン 曾我善仙

曾我善仙 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ スケナリ 曾我祐成

曾我祐成 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ スケナリ 曾我祐成

曾我祐成 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウシヤウ 曾我紹祥

曾我紹祥 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウシユク 曾我紹叔

曾我紹叔 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウセウ 曾我紹仙

曾我紹仙 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソガ セウハク 曾我蕭白

曾我蕭白 蘇我玉翁の孫、推古帝の三十四年大臣となる世に豊浦大臣と稱す、帝廟す田村

ソカスーソカセ

ソカクーソカケ

リケイ

べしと明春母病危篤なり種て湯薬に侍し黙して佛天に禱る自ら骨を削りて而して進む母の病ひ立どころに傳ゆ是の冬堂司に充つ七年臘月三十日後山火發して林木悉く焼く一衆と同じく之を救ふ過々逆風焔を返す回避するに處なく

ソケン

に五海祖綱、蘭船從賀あり(日本河上船燈録)
ソケイ トクエイ 祖溪德海 禪僧、五山文學者、名は德海、字は祖溪、別に水拙また鶴峰と號す

リサン

の鑑遊化す遊香を下りて月石溪に雲隱に聞便溪に玉凡に過し後飛來に寓す親物初め大慈を主とする元元、觀と世系あり又南山に見事す乃ち義を講ぜんことを思ひて

ソシウソセイ

阿州興源寺玉潤和尚、尾州の卓洲和尚等に參し臨風を瑞し卓洲化後備前國清の月潭に從ふ殊歸て見性に住す高永四年詔により法山に住す又山城の圓福に移り後亦尾

ソセイソセキ

て良因朝臣を賜ふ住所の名に因りてなり延喜六年二月二日召されて御前に於て御屏風に書す左近衛中將源定方

ソセン

破石數信の深きに感じ八月入寺開堂し辨香を拈出して佛國の恩に供す嘉祥元年南禪の印を解て勢の善慶寺を開く

ソタウーソタニ

徳兼備の名あり橘白景... 年七十七、芬陀利華院に葬る...

ソタニ 素道 歌人、東六郎氏と稱し素道と號す素道の子なり

ソタニ ガクセン 曾谷學川 篆刻家、名は之唯、字は應聖(一に長聖に作る)學川と號し別に讀磬また佛齋と號す、通稱仲介、京都の人、夙に儒學を片山北海に受け藝刻を高芙蓉に學び遂に藝苑を究む人稱して芙蓉の影と曰ふ芙蓉山房私印譜にその刻印に載す芙蓉嘗て印會を東山に開きその譜に題して東山靈藜と曰ひ且つ之唯に謂て曰く他日吾子、斯の學を汝等に傳はば則ち題するに江霞印影を以てする可なりと寛政九年閏七月朔毛屋山將に東都に遊ばんとす之唯等祖道の宴を浪華北江播干權に設け同人刻する所の印を輯めて譜と爲し題して江霞印影と曰ふ以て先師の意を了するなりと云ふ、著す所、漢藝千字文補遺、印譜考、印語彙考あり寛政九年十月二十日歿す年六十

ソタニ ケイデン 曾谷慶傳 醫家、宗祐の子、母は常清某が女、寛永元年十二月法橋に叙す八年二月初めて將軍秀忠及び家光に謁し九月遺跡を繼ぎ曾谷の醫となり西城に勤仕す十二年家光上洛の時及び日光山參詣の時之に從ひ十五年十二月法眼に昇り十六年仙洞(後水尾上皇)御醫あるにより命を受け京師にのぼるの時仙洞及び東福門院より晒布を賜はる十八年九月家綱胎毒を患ひ時業を厭す承徳元年二月十七日歿す年五十五、法名雲峯葬地宗祐に同じ妻は曾谷宗信某が女後妻は岩崎後守某が女(寛政重修諸家譜)

ソタニ ジュゼン 曾谷善仙 醫家、慶祐の子、父に繼いで醫を業とし天正十一年二月法眼に叙し十四年十一月法印に昇り後豐臣吉吉禮物を患ふの時これを療して功あり文祿四年徳川家康禮物を患ふの時これを療ありしにより賞せられて黄金五枚をたまふ慶長八年伏見に於て徳川家康に謁し後豊臣に至り釣金を賣りて江戸に赴き秀忠に謁す十六年三月後豊臣天皇の御儀を慮し黄金及び慶法院の號を勅賜せらる後外科傳書二卷を著し數寶に備へしかば慶長の外題を賜ふ十九年十一月八日歿す年六十

ソタニーソテツ

年六十九、法名天市、京師淨福寺通淨福寺の松庵院に葬る(寛政重修諸家譜)

ソタニ ソウイウ 曾谷宗祐 醫家、善仙の子、實は曾谷某が子、はじめ醫門に入りて善仙が家業を相續し慶長八年正月法橋に叙し十六年京師より駿府に至り徳川家康に奉仕す十八年八月家康禮物を惱むの時針を以て療治し遂に平癒す後大阪陣に從ひ元和元年七月揚州鶴岡の時に於て采地二百石を賜ひ二年後陽成天皇御儀の時京師にのぼり御薬を調進せりこの時震動を以て神農の二字を染めて賜ひ十月法眼に叙す六年四月將軍秀忠禮物を患ひし時療治して驗あり此の年東福門院入内供奉時服十領、白銀五十枚及び羽織を賜ふ寛永三年將軍家光の上洛に從ひ七年六月月俸三十口を賜ふ十二月十五日歿す年九十二、法名理賢、三田の大松寺に葬る妻は清水常清某の女(寛政重修諸家譜)

ソテツ ウエツウ 祖忠節堂 禪僧、初め了嚴に謁し其提唱を聞き契ふ所あり後嗣きて其席を主す(日本洞上聯燈錄)

ソテツ ツツウ 國秀歌人、菊池氏、伊豆國熊坂村の人、武教の女、資性敏慧讀書を好む年十四、加藤千藤の門に入り國學を修め歌文に長じその名世に彰る歌集を菊園集と云ふ天保九年歿す年五十四(豆州志稿)

ソテツ ツツウ 祖宿絶方 禪僧、一名は素齋、浪州山縣郡富村の人、父は大野氏、對州の太守たり、幼にして出家し獨く諸方に參す後龍泰寺の講堂に投す復命に平常心是道の話をして之に示す奇事提すること久し一日忽然として悟道す後最勝寺に遷る法弟快庵大林的の輩に出でて化を助く信州後盛道、祖宿の徳を尊崇して州の仁科の莊に於て梵刹を創建し名を神龍山大澤寺と云ふ乃ち奮請じて開山第一祖と爲す文龜二年壬戌九月初五日歿す(日本洞上聯燈錄)

ソテツ ミヤウホウ 素哲明峰 禪僧、加賀大乗寺に住す、能登の人幼時台教に出家し長じて建仁寺に入り後加賀に往き登山山に參す契せざる二十年一日機に觸れて頓悟す山即ち印可す書を付して同州の恭翁禪師に參せしむ相見て互に宗説なくして辭せり山、永

ソテメーソトホ

光寺を開き曾に命じて分座せしむ等々傳して曰く因縁正に熟し時節も亦到れり汝我に代りて大乗寺の席を繼ぐべしと乃ち傳來の衣を付す等々永光寺に乘る越前の檀越光禪寺を創め延て開祖となす三度の遺囑風紀高僧なり觀應元年三月廿八日歿を以て歿す年七十四(本朝高僧傳)

ソテメ 蘇提賣 烈女、石州美濃郡の人、寛居年久うして節義著しく兼て貧民を賑はす神護景雲中事朝に聞え終身田租を免せらる(本朝列女傳)

ソトウ シュンガン 祖東春巖 禪僧、族は伴氏、豫州喜多郡大野の人、幼にして當童に異なり兒戲好て佛像を畫く十二歳の時本空和尚に投じて難業を後日庵和尚に從ひて學ぶ庵心印を授く東未だ以て足れりと爲さず去て漢の妙應に往き大徹に依る之れに待する數年徵曹洞の宗旨を以て之に授く應永七年竺山禪師德持寺に住し東を招て首衆に充つ徹法衣を以て之れに給る九年二月大綱の高山に曹溪山瑞光寺を創り開法して大に大徹の道を弘む二十一年十月二十八日歿す年六十三(日本洞上聯燈錄)

ソトホリヒメ 衣通郎姫 允恭帝の妃、名は弟姫、忍坂中庭皇后の妹、姿容絶妙光艶衣を裁す時人號して衣通郎姫と曰ふ、允恭帝其の美を聞き之を納れんと欲す七年十二月新室に宴し帝親ら琴を彈き皇后起て舞ふ時俗宴會毎に舞竟れば即ち座長に謂ひて曰く娘子を奉ずと以て體と爲す皇后帝の己れに謂ひて娘子を進めしむるを悟り舞竟り故らに體詞を陳べず帝皇后に謂て曰く何ぞ常儀を失するや皇后復ひ起舞す舞竟りて曰く娘子を奉ずと帝娘子は誰なりやと問ふ皇后曰ふを得ず乃て曰く妾が妹名は弟姫なり帝復ひ明日夜を遣し之を召す時に姫從ひ近江坂田に在り皇后を畏れて敢て來らず使者七還す猶至らず更に舍人中臣鳥賊津に命じて曰く汝能く弟姫を將來れば朕必ず厚く賞せん鳥賊津坂田に至る姫曰く妾豈天皇の命を拒まん唯皇后の意に違はんと恐る妾死すも敢て召に赴かず鳥賊津曰く天皇に命じて曰く必ず迎得て來れ然らずんば罪を得んとすと時て死を免れず宰相に伏して死せざるのみと固く去らず初め鳥賊津捕を擲中に養ひて往き密に之を愛ふ中庭に於て死す七日、又忠臣を養ふ是れ我が罪を重ぬるなりと乃ち鳥賊津と途に飲

ソネ

く候の春日に至り機井の上に翫ひ自ら酒を酌み以て鳥賊津を勞ひ日京師に入る鳥賊津姫を憐み子龍の家に留め入り其の狀を奏す帝嘉歎し特に之を賞す后姫に至るを知らず帝を慕ひ歌うて曰くわがせがまをば望みなりさきかしの蜘蛛の行ひ今宵のししと帝之感じ乃ち姫に返歌を賜ふ后之を聞き大に怨む姫益々之を憐り姫を離れ遠居せんことを請ふ帝更に宮内河内之を憐り遊り姫を離して後居せしめ姫を遊遊に託し茅渚に幸す后曰く陛下屋茅渚に幸す妾益々之を憐む非但百姓の疾苦する所を恐る帝之が爲に遊幸稍々希なり初め姫の願する所を帝大伴室屋に謂て曰く朕美孺子を得其た之を愛す其名を後世に傳へんと欲す室屋言を承け諸國遊に課し爲を祀れるなり世に國詩の神となして人の景慕する所となる世に傳ふ、夜や寒き衣や薄き片そぎの行合の際に霜や置くらんしの歌は此の神の詠なりと(大日本史)

ソネ アラスケ 曾福荒助 政治家、山口藩士六戸潤平の第三子、嘉永二年正月廿八日生る、寛三郎と稱し出でて曾福氏を嗣ぐ明治元年十月降伏兵取締を命ぜられ軍務に執掌す五年佛國留學を命ぜられ十年歸朝十二年陸軍省七等出仕と爲り十三年士官學校出仕を命ぜり十四年太政官書記官と爲り十九年四月内閣書記局長に二十三年五月衆議院書記官長に任じ動任二等に叙す、同年第一期帝國議會の開かるる事に當り機宜を失はず天下その通才を稱す廿五年山口縣より衆議院議員に選出せられ五月衆議院に因て衆議院副議長に選ばれる當時吏黨民黨争闘最も激烈を極む克助吏黨領袖の一人として最も民黨の長るる所と爲る、二十六年五月特命全權公使に任じ佛國に駐劄し西、葡兩國駐劄を兼ね三十二年一月伊藤内閣に司法大臣と爲り三年山縣内閣に農商務大臣たり三十四年第一次桂内閣の成るや大藏大臣と爲り日露戰役の際財政を料理して功有り依て子爵に叙す、三十九年四月樞密顧問官と爲り六月馬政局官を兼ね四十九年九月副統監と爲り韓國に赴任して統監伊藤博文を輔け翌年博文に代り統監と爲りたるも病の爲め事を罷はす四十二年五月官を辭し閑居病を養ふ九月十三日遂に起らず年六十二

ソネ シツヲ 曾根静夫 官吏、千葉縣安房郡佐久間村の人、明治十四年十一月大藏省一等屬に任ぜられ果して國債局長に至る三十年大藏總務事務官となり三十二年六月山形縣知事に任じ在官一年にして職を辭して北海道拓殖銀行設立委員となり三十二年二月同銀行の頭取に推舉せらる、三十六年五月三十一日特旨を以て位一級を進められ四位勳三等に叙せられ瑞寶章を賜はる同日死去せり年五十九

ソネ シャウケイ 曾根翔脚 鐵筆家、世々唐津藩の臣なり少より心を文史に留め最も鐵筆を好み名工益田勤齋に從つて刀法を受く暇あれば鐵筆を磨き工名樂とす疾病ありと雖も未だ嘗て廢せず人之を問へば則ち曰く是吾が播磨の良劑なり其嘗嗜せりこの如し翔脚は正解、字は集、一字は翔脚、寸書と號す、本族は林氏、考據は師眞、母柳原氏、幼にして曾根正徳の養ふ所と爲る遂に嗣と爲す藩の近習作事奉行に補す火玉(プロダム)は軟質にして滑人何れ且つ刀を下し難しとす寸書自ら工夫して之に彫刻す或は以て吾邦火玉に彫刻するの囑失とす嘉永五年九月江戸に歿す年五十五

ソネ タクミノスケ 曾根内匠助 武田信玄の臣、名は昌世、初め孫次郎と稱し後下野守と改む、信長家康をして甲州を征せしむる時家康に從ひて駿河奥國寺一萬貫を領す信長試せられ後家康の招に應じて之に從ふ依て甲州の士家康に從ふもの多し蒲生氏郷七千石を以て招けども家康に義を存して從はず(武家世紀)

ソネ トクサイ 曾根得齋 儒者、名は直、字は繩猶、得齋はその號なり幼にして讀書を好み諸子百家を鑽究し最も經濟に長す當時古文辭日に衰ふ而して得齋獨り喜びて之を修め終身改めず卒する年五十九、幾ばくもなく家宅災に罹り遺文盡く灰と爲る(香亭撰談)

ソネ ハラ ロクサウ 曾根原六藏 植林家羽後國酒田藩の人、その地酒田より吹浦に至るの海岸一帯の沙浜は秋田街道に當ると雖も草木生ぜず風砂の害

ソネ

常て甚しきを以て六藏慨然として此害を除かんことを謀り庄内藩の許可を受け安永九年居宅を砂濱の間に營み追窮民を募り其の移住せしめし十四戸に及び、六藏春秋の農閑を以て鋤め買ひ入れ置ける樹木の苗を植ふ付くるに暴風の起る毎に吹き荒れたり或は飛散り或は埋まりて千辛萬苦を重ねる一夜の中に元の砂原と成ることその數を知らず然れども毫も屈する氣色なく更に所有の田畑を賣拂ひ以てその費用に充て愈々益々勉めて情ならず是に於てその功勞空しからず遂に二十四十四町一段十四歩の地に善養なる森林を造りその他軍生地數等を併せて二十三町一段三畝七歩を設けたり藩主その功を賞し享和二年南北五百二十五間東西六百間の地は子孫永々預り地と定め與ふる旨また後年此地に新開墾のことありは年賦賦免除たるべき由を記せる繪圖面を與へられたり爾來屢々金穀の賞あり以て事業を興隆せられ其の功を賞して曾野村と呼ぶと云ふ六藏既にして文政四年其の與へらる其後酒田民政より苗字帯刀を許され二年更に家格を地租改正に際してその地一旦官有となり十二年再び民有に下戻さる而して現存の松林四十三萬八千三百餘株、雜木二十五萬五千餘株ありと云ふ(農商工公報)

ソネ マゴロク 曾根孫六 加藤清正の從士文祿年中朝鮮の役加藤清正、小西行長と王城の先登を争ひ既に接頭し及ばんとす諸將之を解し清正遂に郡府の南大門に向ふ行長は疾く王城に入て宮殿に放火し密に南方の通路に人を遣はし輪を絶り清正の破り王城の通路を斷つ清正大に困らばらに數日を費して漸く王城に近くを觀望津の大河あり百丁計り容易く渡る可らず乃ち兵數百人を遣はし舟筏を獲れども見えず歎息自ら早に登て前岸を望みて曰く彼岸敵を見ず恐くは船を向岸に棄てて連れたるならん誰か汝之を取來る者ぞと、諸士皆一言を發せず若黨に曾根孫六あり私に傍らに居て語て曰く某は越中越前川邊に成長し常に大河に泳たり臣に命ぜば今命を捨て汝を試みんと、清正大に悦び直に舟に乗り早き舟を命ず孫六即ち水中に入り向岸に遊して小舟一艘を求め歸る清正喜悅限りなく再び此舟に人數を乗せて道はし水戰の時孫六水中に入て敵の舟底を破り大に勝利を得た

ソネ シーソネハ

ソネ マ

ソネ

ソネ

ソネ

ソネ

リ(約皮録)

ソネ ヨシタダ 曾根好忠 歌人、寛和頃の

人、丹後掾となる人呼ばれ曾丹と云ふ寛和元年

二月十三日圓融院の子日の御遊あり歌人を御前召す平

兼盛、紀時文、清原基輔、源重之等なり好忠及び中原重節

二人また候す小野宮右大臣、関院大将等二人の召されず

して座に着きしを責め之を追ふ二人頭を低れ衆人頗る解

けりと云ふ二人蓋し傳説を聞きて召ありとなしたるなり

段年未詳曾丹集あり好忠の歌を集めたり拾遺新古今撰古

今等にその詠多し

ソノ 園 江戸の女流俳人、氏名鶴海、寛連合、

提窓、蓬萊軒、推敲庵、台天、花十等の號あり、初め風

室湖十の門人、三世一流の女、四世一流の妻なり(俳諧

人物便覽)

ソノ 園 女流俳家、また歌人、勢州松坂の産一

に曰く勢州山田の人) 詞官渡會氏の女、備前の人因西惟

中の妻となり難波に住す和歌を嗜み俳諧は美津女に學び

元祿二年の冬芭蕉の門に入る夫歿して後江戸に來り深川

に居し眼科を以て生計とす性風雅にして世事に拘はらず

袖下の紅粉を以て木履の緒に換へ文庫の蓋を厨の水流し

に用ひしと云ふ(或曰く美津女は正保四年已に歿して

亡し) 深川八幡境内に歌仙樓あり園女が菴ふたる所三十

六株今も過半枯れたり後禪に參し雅樂し智鏡と云ふ而も

猶ほ頂上十根許の髪を遺せり人その理由を問はんとい

すれども感風端然問ふに由なかりしと禪も亦悟道に入り

雲居和尙に答ふる書に

來書の題拜見申候不承心求忘は大道の根元誰も存す

處なり慎りながら參しからず一心源頭の上りての所

作柳は散花は紅る唯のまにまにして常に句をいひ歌を

綴りて遊申候事候無益の言葉なら一切無益の無益の

言葉に候法吳事候嫌ひにて我が平日の行ひは念佛と

句と歌と也極樂(行くはよし) 瑞燈(落るは目出たし

和玉) 自己念其不覺心、清燈已落一燈心、市中歌

黙有明鏡(全識人間清淨心、誰か見ん誰か知るべき有

るにあらすなきにもあらぬ法のともし火云々

以てその志氣を見るべし享保十一年四月廿日歿す年六

三(或は云ふ七十四) 辭世(秋の月夜の露見しそらば夢か

なり)

ソノイソノ 現か南無阿彌陀佛一深川靈巖寺中念佛堂の傍に葬る法名

香林院談琴妙圓信女(俳諧人物便覽、俳諧年表、江戸砂

子)

ソノイケ ムネトモ 園池宗朝 園池氏の

祖、姓は藤原園池家の一、參議正親町三條實昭の嗣子、

宗朝始めて氏を稱す宗朝實は左中將隆昌の子藤原左中將

隆政の二男なり權中納言從二位に進み寛文元年十二月癸

子(知識撰記、華族諸家傳)

ソノイラツメ 園娘女 女流歌人、園生翁の

女、和歌を善くするを以て大寶中その名を知る詠歌は

載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

ソノウウ シュンタク 祖能春屋 禪僧、奥

州の人、大綱和尙に就きて學び總持に出世し龍宗、永澤

の二刹に歷遷す晩年院を州の大塚山中に建て報恩と號す

本院是なり、康正二年歿す年七十五(日本洞上藤燈錄)

ソノウウ タイセツ 祖能大拙 禪僧、相模

鎌倉の人、生れて骨相凡ならず善願寺の大川公乞ひて出

家せしむ年十三、叢山上に登壇進具す十七にして東福

寺の雙蓮公に依る大川圓覺寺に移るに及び記室を掌らし

十人と海を渡りて元に入り初波山に登り無言を以て

江心寺に歸す又出でて長和尙に伏龍山に參して禪法を

問答せり巖中峰國師の法衣を授け拜辭して諸宿老の問を

周旋して延文六年に歸國の島島に來着す肥後の永徳

寺に居て九州の僧俗大に風化に靡く大友氏時能を掌らし

筑前の願孝寺を開かして善願の天日萬壽の兩寺を領

す貞治二年相模に歸りて父を省し翌年上野の吉祥寺に住

す應安六年將軍足利義滿圓覺寺に招けども就かず去て常

陸の笠間に至る郡司弟子の禮を取る律寺を奉りて能を請

請して起つて永和和二年佛曆寺にありて僧堂を建つ會衆三

千に上る將軍義満、建長寺に招く公帖三びて乃ち命を

拜す七月二十四日大覺禪師の百回忌に推されて慶應

寺一會耳を削つて八月五日病に罹り十月二十日に歿す年六十五

歿して廣明園禪師と號す(本朝高僧傳)

ソノウウ アンケン 園田安賢 實業家、鹿

兒島縣の人、嘉永三年九月長右衛門の長男に生る明治元

年(和學者著述目録)

ソノヒ フユナ 其日冬雄 醫家、(其日一

に其日に作る) 尾張海郡郡の人、火明命の後なり州の醫

師と爲る貞觀六年同族十六人と共に姓を高尾張郡と賜

はる(皇國名醫傳)

ソノベ ヨシツグ 園部芳繼 江戸の金工、

傳藏と稱し濃密と稱す、能く刀を以て人物器械山水花竹

の屬を彫す而して獅と龍に於けるや尤も精巧と爲す彼華

毛彫物の勢甲冑の狀神采流動して生氣あり一時

に室刀を製してこれに或重を著すに足るを以て名一時

に動く柳川侯之を開き召し見て之を愛賞し賜ふに俸給を

以てして之を士班に列す其他諸侯延見して彫鑿を請ふ者

多し濃密性温にして遠く酒を飲み喜みて文人墨客と相

交はる酒量に耳熟して談鋒雲の如し見る者以て豪士と爲

す濃密も亦此を以て自ら喜ぶ然れども其物を彫するや甚

だ精細にして意匠動かす唯々日に遊放を以て事と爲すも

興動き神來るに及びては即ち直に一室に入りて心を選削

に専らにして寝食とを廢す最も力を彫鑿に傾け精細經營

の處に至れば徹ち覺えずして射雲を擧り石を換すの聲

を伴ふが如く唯々其形を肖するのみならず併せて其精彩

を得人皆な以て絶技と爲す然れども能く良工の心獨り苦

むを知る者蓋し鮮し芳繼初め田中芳章を師とし後古の

名匠顯乘程榮の法に倣ひ遂に一家を爲す初め芳章の弟子

となりて田中氏を習し文化中舊姓に復す天保十三年正月

二十日歿す年六十四(墓誌)

ソノモトウチ 園基氏 園氏の祖、特明院

大藏卿通基の男權中納言基家の三男基氏始めて氏を稱す

參議皇后宮權大夫となり正三位に叙せられ弘安五年十一

月薨す、薨花を好み青山流なる一派を開く(尊卑分脈、知

譜撰記)

ソノモトシゲ 園基茂 青山流生花の第二

十世基理の子、官中納言に至る嘉永六年活花手引草後編

を著す

ソノモトヒデ 園基秀 青山流生花中興の

祖、基光の子六世の祖基氏生花を好む基秀に至て後花園

帝の勅を受け諸公以下に至るまで花道を教授すべきの

命あり青山の號を賜ふ中納言に任す

ソノヒ ヨシツグ 園部芳繼 江戸の金工、

傳藏と稱し濃密と稱す、能く刀を以て人物器械山水花竹

の屬を彫す而して獅と龍に於けるや尤も精巧と爲す彼華

毛彫物の勢甲冑の狀神采流動して生氣あり一時

に室刀を製してこれに或重を著すに足るを以て名一時

に動く柳川侯之を開き召し見て之を愛賞し賜ふに俸給を

以てして之を士班に列す其他諸侯延見して彫鑿を請ふ者

多し濃密性温にして遠く酒を飲み喜みて文人墨客と相

交はる酒量に耳熟して談鋒雲の如し見る者以て豪士と爲

す濃密も亦此を以て自ら喜ぶ然れども其物を彫するや甚

だ精細にして意匠動かす唯々日に遊放を以て事と爲すも

興動き神來るに及びては即ち直に一室に入りて心を選削

に専らにして寝食とを廢す最も力を彫鑿に傾け精細經營

の處に至れば徹ち覺えずして射雲を擧り石を換すの聲

を伴ふが如く唯々其形を肖するのみならず併せて其精彩

を得人皆な以て絶技と爲す然れども能く良工の心獨り苦

むを知る者蓋し鮮し芳繼初め田中芳章を師とし後古の

名匠顯乘程榮の法に倣ひ遂に一家を爲す初め芳章の弟子

となりて田中氏を習し文化中舊姓に復す天保十三年正月

二十日歿す年六十四(墓誌)

ソノモトウチ 園基氏 園氏の祖、特明院

大藏卿通基の男權中納言基家の三男基氏始めて氏を稱す

參議皇后宮權大夫となり正三位に叙せられ弘安五年十一

月薨す、薨花を好み青山流なる一派を開く(尊卑分脈、知

譜撰記)

ソノモトシゲ 園基茂 青山流生花の第二

十世基理の子、官中納言に至る嘉永六年活花手引草後編

を著す

ソノモトヒデ 園基秀 青山流生花中興の

祖、基光の子六世の祖基氏生花を好む基秀に至て後花園

帝の勅を受け諸公以下に至るまで花道を教授すべきの

命あり青山の號を賜ふ中納言に任す

ソノヒ ヨシツグ 園部芳繼 江戸の金工、

傳藏と稱し濃密と稱す、能く刀を以て人物器械山水花竹

の屬を彫す而して獅と龍に於けるや尤も精巧と爲す彼華

毛彫物の勢甲冑の狀神采流動して生氣あり一時

に室刀を製してこれに或重を著すに足るを以て名一時

に動く柳川侯之を開き召し見て之を愛賞し賜ふに俸給を

以てして之を士班に列す其他諸侯延見して彫鑿を請ふ者

多し濃密性温にして遠く酒を飲み喜みて文人墨客と相

交はる酒量に耳熟して談鋒雲の如し見る者以て豪士と爲

す濃密も亦此を以て自ら喜ぶ然れども其物を彫するや甚

だ精細にして意匠動かす唯々日に遊放を以て事と爲すも

興動き神來るに及びては即ち直に一室に入りて心を選削

に専らにして寝食とを廢す最も力を彫鑿に傾け精細經營

の處に至れば徹ち覺えずして射雲を擧り石を換すの聲

を伴ふが如く唯々其形を肖するのみならず併せて其精彩

を得人皆な以て絶技と爲す然れども能く良工の心獨り苦

むを知る者蓋し鮮し芳繼初め田中芳章を師とし後古の

名匠顯乘程榮の法に倣ひ遂に一家を爲す初め芳章の弟子

となりて田中氏を習し文化中舊姓に復す天保十三年正月

二十日歿す年六十四(墓誌)

ソノモトウチ 園基氏 園氏の祖、特明院

大藏卿通基の男權中納言基家の三男基氏始めて氏を稱す

參議皇后宮權大夫となり正三位に叙せられ弘安五年十一

月薨す、薨花を好み青山流なる一派を開く(尊卑分脈、知

譜撰記)

ソノモトシゲ 園基茂 青山流生花の第二

十世基理の子、官中納言に至る嘉永六年活花手引草後編

を著す

ソノモトヒデ 園基秀 青山流生花中興の

祖、基光の子六世の祖基氏生花を好む基秀に至て後花園

帝の勅を受け諸公以下に至るまで花道を教授すべきの

命あり青山の號を賜ふ中納言に任す

ソノヒ ヨシツグ 園部芳繼 江戸の金工、

傳藏と稱し濃密と稱す、能く刀を以て人物器械山水花竹

の屬を彫す而して獅と龍に於けるや尤も精巧と爲す彼華

毛彫物の勢甲冑の狀神采流動して生氣あり一時

に室刀を製してこれに或重を著すに足るを以て名一時

に動く柳川侯之を開き召し見て之を愛賞し賜ふに俸給を

以てして之を士班に列す其他諸侯延見して彫鑿を請ふ者

多し濃密性温にして遠く酒を飲み喜みて文人墨客と相

交はる酒量に耳熟して談鋒雲の如し見る者以て豪士と爲

す濃密も亦此を以て自ら喜ぶ然れども其物を彫するや甚

だ精細にして意匠動かす唯々日に遊放を以て事と爲すも

興動き神來るに及びては即ち直に一室に入りて心を選削

に専らにして寝食とを廢す最も力を彫鑿に傾け精細經營

の處に至れば徹ち覺えずして射雲を擧り石を換すの聲

を伴ふが如く唯々其形を肖するのみならず併せて其精彩

を得人皆な以て絶技と爲す然れども能く良工の心獨り苦

むを知る者蓋し鮮し芳繼初め田中芳章を師とし後古の

名匠顯乘程榮の法に倣ひ遂に一家を爲す初め芳章の弟子

となりて田中氏を習し文化中舊姓に復す天保十三年正月

二十日歿す年六十四(墓誌)

ソノモトウチ 園基氏 園氏の祖、特明院

大藏卿通基の男權中納言基家の三男基氏始めて氏を稱す

參議皇后宮權大夫となり正三位に叙せられ弘安五年十一

月薨す、薨花を好み青山流なる一派を開く(尊卑分脈、知

譜撰記)

ソノモトシゲ 園基茂 青山流生花の第二

十世基理の子、官中納言に至る嘉永六年活花手引草後編

を著す

ソノモトヒデ 園基秀 青山流生花中興の

祖、基光の子六世の祖基氏生花を好む基秀に至て後花園

帝の勅を受け諸公以下に至るまで花道を教授すべきの

命あり青山の號を賜ふ中納言に任す

ソノヒ ヨシツグ 園部芳繼 江戸の金工、

傳藏と稱し濃密と稱す、能く刀を以て人物器械山水花竹

の屬を彫す而して獅と龍に於けるや尤も精巧と爲す彼華

毛彫物の勢甲冑の狀神采流動して生氣あり一時

に室刀を製してこれに或重を著すに足るを以て名一時

に動く柳川侯之を開き召し見て之を愛賞し賜ふに俸給を

以てして之を士班に列す其他諸侯延見して彫鑿を請ふ者

多し濃密性温にして遠く酒を飲み喜みて文人墨客と相

交はる酒量に耳熟して談鋒雲の如し見る者以て豪士と爲

す濃密も亦此を以て自ら喜ぶ然れども其物を彫するや甚

だ精細にして意匠動かす唯々日に遊放を以て事と爲すも

興動き神來るに及びては即ち直に一室に入りて心を選削

に専らにして寝食とを廢す最も力を彫鑿に傾け精細經營

の處に至れば徹ち覺えずして射雲を擧り石を換すの聲

を伴ふが如く唯々其形を肖するのみならず併せて其精彩

を得人皆な以て絶技と爲す然れども能く良工の心獨り苦

むを知る者蓋し鮮し芳繼初め田中芳章を師とし後古の

名匠顯乘程榮の法に倣ひ遂に一家を爲す初め芳章の弟子

となりて田中氏を習し文化中舊姓に復す天保十三年正月

二十日歿す年六十四(墓誌)

ソノモトウチ 園基氏 園氏の祖、特明院

大藏卿通基の男權中納言基家の三男基氏始めて氏を稱す

參議皇后宮權大夫となり正三位に叙せられ弘安五年十一

月薨す、薨花を好み青山流なる一派を開く(尊卑分脈、知

譜撰記)

ソノモトシゲ 園基茂 青山流生花の第二

十世基理の子、官中納言に至る嘉永六年活花手引草後編

ソシカ

覺、建長二寺に遷りて逝く致して... 高僧、字は圓頓、武州足立郡...

ソシカソシカ

尊尼王 後西院帝の女、宮人藤原氏の生む所なり...

ソシカソシシ

尊尼王 後西院帝の女、宮人藤原氏の生む所なり...

ソシカイ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカク

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

ソシカホフシ

尊尼王 高僧、字は圓頓、武州足立郡の人、泉福寺の信持法師に就きて...

新版大日本人名辭書上卷

ア	一	イ・キ	一四七	ウ	三四一	エ・エ	四〇一	オ・ヲ	四三三
カ	六三七	キ	八〇〇	ク	八八九	ケ	九六九	コ	九九〇
サ	一〇七五	シ	一一〇三	ス	一一三三	セ	一一七三	ソ	一四一七

大正十五年三月十七日印
大正十五年三月二十日發

刷 行

新版大日本人名辭書【上卷】



著作兼發行者

大日本人名辭書刊行會

東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地

右代表者

大 島 秀 雄

東京市京橋區山下町一番地

印刷者

望 月 清 矣

東京市京橋區山下町一番地

印刷所

英文通信社印刷所

發行所

東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地

大日本人名辭書刊行會

電話大手五五八五番
振替東京二一四五三番

發行所 大日本印刷株式會社



大日本印刷株式會社
東京市丸の内區丸の内一丁目一番地
電話 二二二二

大正十五年三月十日
發行

大日本印刷株式會社

終